

神のまなざしに潤う

奨励	稲山 聖修【いなやま・きよのぶ】
奨励者紹介	梅花女子大学・梅花女子大学短期大学部宗教主事 梅花女子大学短期大学部生活科学科准教授

更に神は言われた。
「あなたたちならびにあなたたちと共にいるすべての生き物と、代々とこしえにわたしが立てる契約のしるしはこれである。すなわち、わたしは雲の中にわたしの虹を置く。これはわたしと大地の間に立てた契約のしるしとなる。わたしが地の上に雲を湧き起こらせ、雲の中に虹が現れると、わたしは、わたしとあなたたちならびにすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた契約に心を留める。水が洪水となって、肉なるものをすべて滅ぼすことは決してない。雲の中に虹が現れると、わたしはそれを見て、神と地上のすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた永遠の契約に心を留める。」
神はノアに言われた。
「これが、わたしと地上のすべて肉なるものとの間に立てた契約のしるしである。」

（創世記 9章12-17節）

祭りが最も盛大に祝われる終わりの日に、イエスは立ち上がって大声で言われた。「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」

（ヨハネによる福音書 7章37-38節）

ぼくらはみんな
生きている

10日前の話。さる10月13日、漫画家のやなせたかしさんが94歳で天に召されました。やなせさんと言えば、「アンパンマン」が有名。戦争を経験され、弟さんが戦死されるという痛ましい経験から、「自ら傷つくことに正義なし」、また、敗戦直後の食糧不足の悲惨さを経験されているところから、もし絶対的な平和があるとするならば、全ての人びとが飢えから解放されることだとの想いから生み出したキャラクターでした。しかし昭和40年代生まれの私の世代になりますと、アンパンマンはお子様向きのイメージが強く、むしろ「手のひらを太陽に」という歌のほうが、数々の人生の想い出と重なります。「ぼくらはみんな 生きている 生きているから 歌うんだ ぼくらはみんな 生きている 生きているから かなしいんだ 手のひらを太陽に すかしてみれば まっかに流れる ぼくの血潮（ちしお） ミミズだって オケラだって アメンボだって みんな みんな生きているんだ 友だちなんだ」。懐かしい想い出です。けれども、冷静に考えてみますと、奇妙な歌ではあります。大体、この歌詞で用いられる「ぼくら」という主語。歌詞の書き手は別として、一体これは人間なのかという問いがわいてきます。つまり、ミミズだって、オケラだって、アメンボだって、と歌詞にはありますが、佐藤くんや山口くんや、あるいは、さっちゃんや、マーくん。そのような人名が一切出てこない。歌の一番に関して言えば、ミミズ。これは節足動物ですありません。他の生き物は辛うじて昆虫ではありますが、皆さんはオケラを見たことはありませんか。アメンボは辛うじてあるかもしれませんが、都会では、とんとお目にかけられなくなりました。

ミツバチの失踪

たとえば、最近の話題としては、巣箱で飼育されているはずのミツバチが突然姿を消すという事件が報告されております。これは日本の在来種であっても、明治以降に養蜂業が活発化した結果、外来種としての地位を築いた西洋ミツバチでも同様なのですが、ミツバチが失踪していくという報道が盛んにされております。日本では俗に「いないいない病」といわれているのですが、それはどのようなものかと申しますと、幼虫を育てるだけの働き蜂が不足、あるいは完全にいなくなるか、巣の周りにはハチの死骸が全く見られない。その一方で、巣の中には幼虫が置き去りにされている。蜂蜜や花粉といった食料は残されたままで、女王蜂は生存し、放置されているという特徴があります。この失踪事件が、世界で最初に確認されたのは北米大陸で、2006年に西洋ミツバチが一夜にして失踪する事件が多発し、一時は全米のミツバチの数が4分の1にまで減少、養蜂家には大打撃となりました。この他、西ヨーロッパ諸国、インド、ブラジル、台湾、日本でも同様の事件が報告されております。

もともとミツバチは、花なくしては生きてはいけません。花を咲かせる植物は、同時に種をもつ植物でもあります。このような植物が地上に現れた時代と言えば、白亜紀、子どもたちの大好きな恐竜の活躍した中生代でありますから、昆虫の歴史からすれば、比較的新しい、新参者の生き物だといえるかもしれません。とは言え、現生人類の生存史は、たかだか25万年ですから、その点から考えれば、生命体としては、ミツバチは人類の大先輩。その大先輩が、突然人間のもとから姿を消してしまう。いったいどういうことなのでしょう。エネルギー問題で保守的な人は、風力発電の巨大な風車の回転に伴う低周波がその原因だと主張します。しかしその見方ですと、風力発電が普及していない日本のケースが説明できません。携帯電話の電磁波に影響を受けた、という説もありますが、そうであるならばなぜ一晩で急に失踪するのか、これもまた理由にはならない。実は、最近最も有力な説として注目されているのが、発達した農薬や殺虫剤が働き蜂の神経を侵し、パニックを起こして帰巣本能を破壊してしまうという見方が現れています。

私たちの身の回りでも、網戸にスプレーをして蚊を寄せつけない薬剤や、軒下にぶら下げておくだけで虫が来なくなる製品が出回っておりますが、そもそも人類よりはるかに長く、過酷な環境を生き延びてきた節足動物を寄せつけないわけですから、その毒性は想像を絶するものがあります。しかも、繊細なミツバチとは異なり、数千分の1でも個体が生き延びれば、薬剤に耐性のついた、強靱な生命力のある個体が誕生する仕組みのゴキブリは、人間の殺虫剤開発とは、「いたちごっこ」の闇柄ですが、類としては3億年生き抜いてきたゴキブリの、生存競争での勝利は明らかであり、人類は自らの作り出した化学物質によって、殺虫剤を用いた世代だけでなく、子どもたちの健康やホルモンのバランスを崩そうとしているのです。

暮らしの快適さという
神話のなかで

なぜこんなことになってしまったのでしょうか。それは私たちが、誰かとともにいることへの、感謝と幸せを忘れ、自己本位に「暮らしの快適さ」という尺度を絶対化したあまりに、私たちの世代が未来への展望を忘れ、未来のために何を遺すのか、次の世代のために何を遺すのか、という問いかけに耳を傾けなくなったことによると考えても、間違っていないでしょう。そして、人間をも含め、いのちとは、人間の思い通りには動きませず、思った通りに成長することもない、すなわち、CGの世界でも二次元の世界でも、ロボットでもない。不確定な要素、想定外の要素を常々はらんでいるのだということを、悪いことであるかのように、いつのまにか思い込んでしまうのです。たとえば、私たちは生き物ですから、生きていれば、当然、臭いというものを発します。この臭いというものには、汗などの人体から出る老廃物も考えられる。となれば、それを栄養にするバクテリアがいて、その老廃物を分解することと引き換えに、バクテリアそのものが増えることになる。このバクテリアを捕食する微生物がいて・・・という小さな生態系が、私たちの身体や暮らしのどこにでもあるのですが、人間はその生態系を「汚い」と認識し、根絶やしにしようとする場合が珍しくありません。

洪水後に結ばれた
神の契約
ーノアの洪水物語よりー

聖書の世界の物語にしても、そのような人間の身勝手さと、人間に先んじる神の恵みや計らいとが、絶えず葛藤していくというドラマを、垣間見ることがあります。本日の聖書では、旧約聖書全体を貫く、神の契約の大原則が記されております。
「更に神は言われた。『あなたたちならびにあなたたちと共にいるすべての生き物と、代々とこしえにわたしが立てる契約のしるしはこれである。すなわち、わたしは雲の中にわたしの虹を置く。これはわたしと大地の間に立てた契約のしるしとなる。わたしが地の上に雲を湧き起こらせ、雲の中に虹が現れると、わたしは、わたしとあなたたちならびにすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた契約に心を留める。水が洪水となって、肉なるものをすべて滅ぼすことは決してない。雲の中に虹が現れると、わたしはそれを見て、神と地上のすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた永遠の契約に心を留める。』神はノアに言われた。『これが、わたしと地上のすべて肉なるものとの間に立てた契約のしるしである。』」（創世記9章12ー17節）人間も含め、地上の全ての生き物を拭い去ってしまったはずの洪水の終わった後で立てた神の契約は、洪水とは真逆の内容であります。それは、単に、人間を滅ぼさないとする内容だけでなく、人間以外の肉なるものをも対象にしているという点です。いわゆる洪水物語とは、もとはと言えば、二つの大きな河に挟まれた、メソポタミアという地域に栄えた、都市バビロンに、ヘブライ人が捕虜として強制的に連れてこれられ、暮らしを余儀なくされた時代に記された物語だとされております。この二つの大きな河は、流れる水の量と長さのバランスが必ずしもよいとは言えず、上流で大雨や急な雪解けなどが起これば、人びとが暮らす地域の天候が、小雨程度であったとしても、すぐに水かさが増し、不定期に洪水を繰り返したとのこと。この事態は、地域に暮らす人びとにとりましては、全くもって予測ができません。日本でも、「風神」や「雷神」という言葉がありますが、人間の想像を超える自然災害について、その源を神に帰する例は、世界各地に散見されます。しかしながら、旧約聖書の洪水物語の注目すべき事柄とは、神を怨む人が、誰も描かれないという点にあります。

自然災害と 洪水物語の重なり

ところで、津波で壊滅的な被害を受けた宮城県の気仙沼市の階上（はしかみ）中学校で、東日本大震災から10日余りの卒業式で答辞を読んだ生徒が、涙ながらに語った「しかし苦境にあっても天を恨まず」という言葉を、私はこの物語に登場する人びとの態度に重ねます。誰も神を怨まない。暮らしを失くし、家族を失くし、財産を失くした後、人びとが考えたであろう事柄とは、仮に災害という悲惨な出来事があったにせよ、それは、私たちを滅ぼすことを究極の目的とはしてはいないのであり、問題の所在とは、むしろ人間の側にあるのではないか、という問いかけではなかったかと、私は思うのです。洪水物語の場合は、その冒頭、創世記6章13節で「すべて肉なるものを終わらせる時がわたしの前に来ている。彼らのゆえに不法が地に満ちている。見よ、わたしは地もろとも彼らを滅ぼす。」と神が語ったとしても、9章10節には「あなたたちと共にいるすべての生き物、またあなたたちと共にいる鳥や家畜や地のすべての獣など、箱舟から出たすべてのもののみならず、地のすべての獣と契約を立てる。」とあるように、洪水をもってしても絶やすことのできなかった獣の存在を暗示しているようでさえあるのです。私たちは先入観から、この洪水物語を通して、人間の行為に対して神が恐ろしい罰を与えたという、恐怖感が先立つ物語というような理解をしておりますけれども、実はそうではないのではないかと。確かに6章5―6節におきまして、「主は、地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのを御覧になって、地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められた。」という動機によって、洪水を起こしてはおります。ただし、人のみならず、地の全ての獣までも射程に入れた契約の祝福の後、ノアが祭壇に献げた宥めの焼き尽くす献げ物の香りをかぎ、8章21節では「人に対して大地を呪うことは二度とすまい。人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ。」と、洪水を生起させる動機となっているはずの言葉が、8章では、赦しの言葉としても、解釈が可能なほど、豊かな広がりを見せております。人間が構想する暮らしの快適さとは、必ず快適さを追求める者以外の存在を排除したり、蹴落としたり、消し去ったりする状況を伴うと言えます。その理屈に異を唱えれば、変わり者という烙印を押されてしまうのは、旧約聖書の物語にしばしば描かれる通りです。このような物語の道筋は、新約聖書では、まさに、神の愛を中心に据え、敵をも愛する生き方を説き、排除の姿勢を取らず、苦しむ人を受け入れ、自らもまた変り果てることをも厭わなかった救い主自らが、十字架へと排除されていく物語へとつながります。けれども、救い主イエス・キリストに示された、排除を恐れない神の愛の力とは、旧約聖書の天地創造の物語から、神が創造された宇宙も含めた、全ての被造物を包んでいるのではないのでしょうか。

「死んではならない！」 との呼びかけ

天地創造の物語で、神は人に、「善悪の知識の木からは、決して食ってはならない。食べると必ず死んでしまう。」（創世記2章17節より）と語りました。この箇所では、神は、人に死んではならないと語っているとも言えます。ヨハネによる福音書で、主イエスは、大声で、「渇いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」（ヨハネによる福音書7章37―38節）滅びに至る洪水ではなく、いのちの力に満ちた水。それは人や生き物を活かすところの水でもあります。その潤いが、その人から、流れ出るようになる。人びとの関わり、自然との関わりがカラカラに干からびたと思われる世にあって、なおもその水は、人の心を潤してやまない、神の慈しみに満ちたまなざし、赦しのまなざしへとつながっていく。多くの混乱と試練を経ても、神の愛は、その試練のなかで、私たちに忍耐と練達、そして希望と慰めをそなえてくださる。神と人との豊かな交わりが、私たちの只中において築きあげられていくと確信してやみません。

2013年10月23日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録